

spew

I feel like mother of the world

2018.04.08 — 2018.06.17



この度 rin art association では、写真家三名により結成された spew による新作個展を開催いたします。
本展では、写真をベースに制作されたインスタレーションやパフォーマンスを発表いたします。

〈ステートメント〉

もし人が自分の排泄物をもう一度取り込むことや自分自身を食することで十分な栄養を確保でき、生きながらえることができるのならば、それはとても完結していて美しいことだろう。

富樫義博の「HUNTER x HUNTER」において、五代厄災のうちの一つであるソバエ病は不死の病であり、その病にかかったものは人としての食事をせず、自給自足で50年もの間生きながらえている。

物語の中で、ソバエ病にかかったその人物は自分自身を栄養源として食することで永遠に存在し続け、さらに外界から完全に隔離されている。言い換えれば、周囲の時間的、状況的關係性に頼る必要がなくなっている。この自給自足における美しさは、自身のみで自己が存在していけるという文脈の必要のなさであり、揺るぎない存在の拠り所が己のみであるという孤高性にある。しかし私たちは、関係性、つまり文脈なくしてその真価を語ることはできない。生まれ落ちたそのまま、そのものにその価値があるということを知らせる術は伝えられていない。

このソバエ病の人物が自分自身の排泄物や肉片から栄養を吸収できなくなった場合、完結した輪は損なわれ、備わっていた絶対的な価値はただ消失してしまうだけなのだろうか。

口内にもものを入れ、その粘膜に異物を感じ、喉の奥へと落ちていく感触をただ弄ぶことになる。そして何メートルも続く体内のトンネルを十分な時間をかけてゆっくり進んだ後、徐々に体外へ、光の下へ押し出されてくるのを肛門で確かめたとき、この一方通行と思われた味わいの行為は新しい選択肢に出会う。

体外へ排出されることで口内に入れる前の状態に一回りして戻ったのならば、そこから逆の順序を試してみることもできるし、もう一度同じ順序を辿ることもできる。

この行為そのものには意味はない。

それとも繰り返す事で文脈から切り離された独自の価値がいずれはできあがっていくのだろうか？

何度も繰り返すしかないこの手段が、無意味ではあるがとても完結している”底無しの絶望”という希望を語るのだ。

spew

2016年 写真家三名により結成された出版レーベル。自費制作の本の出版の他、写真をベースにインスタレーション、パフォーマンスなどを組み合わせた活動を行なっている。

オープニングレセプション 2018.04.08 18:00 - 20:00

パフォンス spew & 村田峰紀 2018.04.08 19:00 -

[水-日] 11:00 - 19:00 [月-火] 休廊 -

contact

rin art association

370-0044 群馬県高崎市岩押町 5-24

t : 0273-87-0195

e : contact@rinartassociation

w : <http://rinartassociation.com>